好血菌

かっぺ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
好血菌

【Ｎコード】
Ｎ７９７２Ｅ

【作者名】
かっぺ

【あらすじ】
好血菌。それは人間により作り出されたウイルス。感染から約一ヶ月で感染者を死に至らしめる。直接接触により感染は徐々にだが確実に広まっていく。感染者は推定で三百万人といわれ、未曾有のバイオハザードに日本は包まれる事となる。しかし、もっとも恐怖すべきものはウイルスではなく、人そのものであった・・・。

プロローグ

地獄。そんな言葉が適当かもしれない。つい最近まで仲の良かった者同士までもが生きるために殺し合う。それ故に、それ以外にハマル言葉が浮かばない。最も醜く、最も恐ろしいものは他の何者でもない、人間自身だった。

そんな人間に絶望して、彼は今回の事件を画策したのかもしれない。

人類史上最大のバイオハザード。いや、そもそもこれはバイオハザードと呼べるのだろうか。

なにせ、原因はウイルスにあるのではなく、人にあったのだから。

だが、それを治めたのもまた人であった。

だれも信じないだろう。だが、この目で見たのだ。それを。奇跡の一部始終を。

こんなオカルティックなことを記事にするなんてどうかしているかもしれない。だが、ありのままを読者に伝えよう。それがジャーナリストの務めであるのだから。

一六月七日　日高新聞　著　沖田正信一

第一話

ｃａｓｅ１　沖田　正信　ジャーナリスト

「真実を報道する」

―それが俺の口癖だった。事実を曲げてしまうこと、確証の無いことを安易に民衆に垂れ流すことをひどく嫌った。それがジャーナリズムであると確信していたからだ。かといって、ペンの正義を信じるわけでもない。つまりは、端から見れば邪魔者だったんだ。上司の言うことは聞かない上に、反発する。おまけに取材先とのトラブルなんざしょっちゅう。そりの合わない、思想の対立する連中を嫌悪していた。結局は、ただの糞ガキでしかないわけだ、俺は。

「十月だってのにばかに冷えるな」

苛立ちから、吐き捨てるようにつぶやくと、胸ポケットから煙草を取り出し、火をつける。

沖田は煙草を吸う際、最初の一口目は決して肺には入れない、ふかすだけ。肺に行き着かなかった真っ白な煙を口から吐き出し、改めて煙草をくわえる。煙を肺に吸い込み、体中を駆け巡らせる。

「こんな美味い物が有害だとは信じられないな」

―フリーのジャーナリストになって二年、たいしたネタは上げられていなかった。自分は他者とは異なる、自分には力がある。そんな風に思い上がったツケがこれだ。芸能人のスキャンダルを追っか

けるケチな男に成り下がっていた。現状がたまらなく嫌だったが、かといって路線を変えるわけにも行かなかった。なにせ一番金になるネタだ、芸能人ってのは。理想だけじゃ食ってはいけないってわけだ。しかし、今回のネタはそれ以上に下らないものだ。下等、劣等、下劣。俺の信条の中でも最も嫌悪するものに手を出そうとしているのだから。確証の無いもの。つまりはゴシップってやつだ。

「落ちたもんだ」

苦笑いで煙を吐き出す。

「一応はエリートコースを辿っていたんだがな」

煙は宙で何らかを形作ろうとして暫く漂うが、風に流され空に消えていく。

「何故狂っちまったんだろうな」

もう一度煙を体に取り込もうとしながら、

「・・・性根の問題だろう」

と呟き、煙草を一口吸い、吸殻をその場に捨てた。

一生まれた家庭は裕福ではなかった。かといって金に心底困るほどでもなかったが、決して裕福ではなかった。どっかの誰かさんとは大違いだった。それでもそれを怨んだことなんてなかった。ただ一度を除いて。そもそも、今日こんなにも苛立っているのはネタの発信源のせいだ。何年も連絡なかったのに突然、思い出したように連絡してきて、

「ジャーナリストやってるんだろ？調べて欲しいことがあるんだが。これが事実なら特ダネになると思うぞ」

ってんだ、笑わせるな。特に追っかけているネタもなく、渋々承諾した自分を怨む。あいつが言うには、

「保有してはいけない、つまりはバイオハザードにあたるレベルのウイルスを、とある科学者が作り出すことに成功したらしい。事実かどうかは分からないがな。探ってみてくれないか。研究室と書斎を調べれば一発だろう」

だそうだ。確かに事実なら特ダネだが、空振りの匂いがぷんぷんする。無駄足になりそうだ、遠くまで来たんだが。

「うぅ、寒い。何月だと思ってるんだ」

溜息は微かだが白い。今日の気温には場違いな格好で来だろう、心なしか震えている。

―それにしても、今回のターゲットである佐伯　英二って奴は調べれば調べるほどきな臭い奴だった。佐伯　英二。埼玉県生まれ。５６歳。地元では有名な名家の次男として恵まれた環境で育った。辿ってきた経歴はどれも超がつくほど一流。およそ挫折なんて言葉を知らずに生きてきたのだろう。小学校から高校まで毎回のように学年トップをひた走り、東都大学にストレートで合格、当然のように主席。当時は医者を目指していたようだが、大学在学中に突然進路を変更し、科学者の道を進んでいる。在籍中に発表した研究は今でも講義で使われているほどのものらしい。ガイア理論の応用による生命の数量の一定化、だったっけか。なにやら小難しいことをつ

らつら並べていて、俺には殆ど理解は出来なかった。そんな後世に残るような研究をしたかと思えば、大真面目にバイオタイド理論をジーキル博士とハイド氏を例に挙げて学会で発表したり、テロメアに触発されたのか細胞分裂の分裂回数の限界を計算ではなく実際に測ってみようとしたり、馬鹿なのか天才なのか。天から才能とやらを与えられた奴の思考回路ってのは、凡人にとってはそれを熟考することすらおこがましいってことか。全く、虫唾が走る。だが、きな臭いのはそれらではない。もっと後の話だ。それらはあくまでも彼が異常者であると判断するための一つのとっかかりであり、異常の全てではない。問題は近年の研究内容。彼は、それら近年の研究を除けば単なる変わり者で済むのかもしれないが、そうではないのだからそれだけでは済まされない。特に馬鹿らしいのが「合成生命体」の研究。俗に言うキメラってやつだな。こんなの真面目に研究している科学者ってどうだろう。マッドサイエンティストなんて今時流行らない。Ｄｒ．ワイリーで十分だ。とにかく、そんな馬鹿げた怪しさ満点の佐伯博士を調べるのが、今回の仕事なわけだが、ゴシップを忌み嫌った俺がこんなゴシップの塊のような男を調べるはめになるとは。つくづく苛立つ。

「予定ではそろそろ外出するはずなんだがなぁ」

―どうもこういう仕事をするに当たって短気な性格が仕事の達成の大きな障害になって仕方が無い。元来、向いていないのかもしれない。それでも、好き好んではじめた仕事なわけだから、文句も言えるはずは無い。待ち、に徹するしかない。そもそも、確かに叩けばホコリの出そうな人物ではあるが、それすらもゴシップの域を抜け出る物ではない。にもかかわらず、俺が佐伯　英二の調査を続けているのには理由が三つある。一つ目は、あいつからの話だったから。二つ目は、特にすることもないから。そして三つ目が、佐伯という男のえもいわれぬ魅力。人は考える葦であるとはよく言ったも

ので、知的探求によって得られる快感は何物にも変えられぬ極上の悦楽なのである。結局、自らにとって完全に計り知れぬ人間が全くの未知な研究をしている、という事象に期待しているのだ、快楽を与えてくれることを。果たして、本当に佐伯　英二はバイオハザードレベルのウイルスを保有しているのだろうか。それに関する情報は何処をあらっても全くといっていいほど出てこなかった。ただ、日長一日、自らの研究室から出てこないことだけは分かっている。そこで何らかの研究を行っているのは間違いない。それに一縷の望みを託すしか俺には出来ないわけだ。

満月が沖田を闇夜に微かに照らし出している。その様はどこか神秘的だ。

―それにしても、情報どおりならもう外出してもいい頃だろう。既に時計の針は二十一時を回っている。情報通りなら、とっくにお気に入りの料亭に夕食を食べに行っている時間だ。昨日も、一昨日も外出してはいない。三十も半ばに差しかかろうとする男を寒空のもと、こんな夜中まで外に突っ立たせておくとはふざけたジジイだ。

「えぇい、くそったれが」

苛立ちは大胆な行動を誘う。計画性も成功の見通しも皆無の行動を。だから沖田は嫌っていた、待つという行為を。

周囲を警戒しながら佐伯　英二の研究室兼自宅の前に向かう。それにしても、研究室といっても外観はそれを全く匂わせない。閉め切り、外から内を覗く事は不可能という点を除けば、不自然な点も特にはない。これだけ人里離れた場所に一軒屋があること自体、不自然なのだが、それに関してはこの際目を瞑ろう。

一人暮らしにしては大きな家。鉄筋コンクリートの、家というにはあまりに殺風景な外観だ。こんな人里から離れた、殺伐とした一軒家に住む五十過ぎの男の気は知れない。

「そもそも、家の中にいるのか？」

そう呟きながら玄関から家の中の気配を窺う。どことなく、人の存在を感じない。ポストに溜まった新聞がそれをさらに助長する。

インターホンを押しながらの、

「すいませーん」

にも全く反応はない。

しかし、三日前には確かに家の中に誰かがいた。沖田が電気メーターを確認した際は電気メーターは動いていたので、屋内で電気を使用しているのは明確だ。佐伯　英二は引きこもりだとでも言うのだろうか。

一夕食は必ず外食なのではなかったのか。あいつの言うことはアテにはならないじゃないか。

「さて、と・・・。もう一度電気メーターを調べてみよう。動いてなかったら侵入、動いてたら、また張り込みだ」

敷地内をゆっくりと移動する。幸い下は芝生なので足音は立たない。玄関とは真反対の位置の電気メーターに辿りつくと、ポケットから携帯電話を取り出し光を当てる。薄暗いが、これならメーターぐらいは確認できる。

「動いてる。いるはことはいるみたいだな」

電気メーターを確認すると、また退屈な張り込みに戻らなければならないという思いが頭を巡った。軽く溜息をつき、足を玄関の方に向けようとした時に、沖田はあることに気がついた。三日前に電気メーターを見に来た時には全く気がつかなかったが、一階の窓の一つが少しだけ開いていたのだ。

「・・・・・・」

一中を覗いてみよう。

危険と好奇心を秤にかけて完全に好奇心が勝った瞬間だった。

中には佐伯　英二本人がいて、見つかってしまうかもしれない。下手をすれば通報、そして逮捕。そんな危険を無視して、心に芽生えた好奇心は既に体を支配していた。

ゴム手袋をポケットから取り出し、はめると、そっと窓に近づき、窓の隙間からカーテンを手でめくり、中を窺う。

何も見えない。明かりが点いていないのだから当然だった。

「誰もいない、のか？」

人間という物は不思議な物で、どれだけ警戒していようと、どれだけ気を張り詰めていようと、一度それが途切れるともう一度もとのモチベーションに戻すのは容易ではない。つまりは緩んでしまったということだ、彼の緊張は。

窓から身を乗り出し、靴を脱ぎ、手に持ち、侵入する。当然、これは犯罪だ。ばれれば捕まる。だからこそ沖田は証拠を残さないようにその点に関しては慎重だ。

―この三日間で、この家に出入りしたのはただ一人。四十代の男だけ。あの男は佐伯ではなかったから、佐伯はこの家のどこかにいるはず。だが、これはどうだ。どこかしこも灯りはついておらず、人の気配は全く無い。佐伯はどうやら外出中のようだ。それならそれで思う壺だ。徹底的に調べてやる。

「三日間の張り込みは何だったんだろうな」

ぼやきが部屋にこだましたが、当然それに誰かが反応するはずはなかった。

リビングには特に変わった物は無い。それこそ普通の家庭だ。ただ、異常なほど家具が少ないのが気になる。生活臭が全くしない。

「情報ではどこかに研究室があるはずなのだが」

沖田は一階を散策してみたが、どうやらここにはお目当てのものはないようだ。研究室はどうやら二階にあるようで、二階へと向かった。

―出来るだけ迅速に行動する必要がある。もしかしたら佐伯が帰宅するかもしれない。帰宅してきた佐伯とばったりってのだけはご勘弁だ。

真っ暗な階段を携帯電話のライトで照らしながら登ると、三つの

ドアがある。とりあえず、こういう場合は左からだ。迷ったら左。沖田のジンクスだった。

ゆっくりとドアを開ける。鼻を突く薬品の独特の臭い。どうやらここが研究室のようだ。

研究室といっても大した広さではない。十五畳程度の部屋に何に使うか想像もつかないような器具が乱雑に並んでいるだけだ。後は透明なケースの中にネズミやらが飼われている。実験用だろう。心なしかぐったりしているように見える。

暫く散策していると、沖田の目に、奥の机の上の書類が目に飛び込んできた。

手に取ってみたが、携帯電話の灯りでは読みづらい。

「好・・・血、菌？こうけつきん、とでも読むのか？」

その書類は「好血菌」と呼ばれるウイルスに関する書類らしい。十ページほどだろうか。好血菌というウイルスに関することが延々と書き連ねてある。詳しい詳細を読むための時間も灯りもないため、沖田はその書類を持ち帰って読むことにした。とりあえず、収穫はあったと考えていいだろう。これが、あいつの言っていたウイルスに関するものだという確証は全くないのだが。

収穫物を一刻も早く確かめたくて、研究室を後にしようとした、その時、「ぱんっ」という小さな破裂音と「びちゃっ」というにぶい音が室内に響いた。沖田が音のするほうに目をやるとネズミの入っていたケースがそこにはあった。

恐る恐るケースに近づくと、そこには、ネズミが。

いや、つい先ほどまでネズミと呼ばれていた肉塊が、そこにいた。

ライトで照らしたと同時に小さく、

「ひっ」

と漏らした自分をなだめ、肉塊を凝視する。

先ほどまでは確かに、生きていた。しっぽが動くのをこの目で見たのだ。しかし、現実に目の前には胴体だけの、血まみれのネズミがケースの中で横たわっている。元はネズミの頭部と呼ばれていた物の欠片と思われる肉塊が、ケースの至る所にこびりついている。頭部は、炸裂したとでも言うのだろうか。二、三度、ぴくぴくと動くと、ネズミは全く動かなくなった。

暗闇とその場の雰囲気、そして生命の不可解な死を目の当たりにしたせいで、それらが化学反応を起こし、恐怖心を駆り立てる。人は、未知を好み、未知を恐れる。不思議な生き物だ。

こういった場合、人は面白い物で、逃避行動として妄想に逃げる傾向がある。彼の場合もそれに当たった。実は、佐伯はこの家の中にいて、自分の侵入を知っている。そしてあいつとグルになり自分を驚かそうとしているのだ。そうに違いない。そんな馬鹿げた妄想に逃げようとしていた。

沖田はわけも分からずきょろきょろと周囲を見渡すと、

「もう、帰ろう」

と呟いた。それは自分に言い聞かせるようにであり、言い訳のようでもあった。

研究室から出てきた沖田は階段を下りようとした。しかし、そこであることを思い出した。そして、それが足を止めた。

「研究室と、書斎、って言ってたよな、あいつ」

沖田はまだ研究室しか調べてはいない。

「残りの二部屋のどちらかが、書斎、か？」

言葉と同時に、三つある部屋のうちの真ん中の部屋のドアノブに手をかける。ゆっくりと開けると、またしても鼻をつく臭いがした。

しかし、今度は薬品ではない。

明らかな、血の臭いだった。

「うっ」

臭いにむせ返りながらも、部屋に足を踏み入れる。一歩歩くごとにぴちゃぴちゃと水溜りの上を歩いているかのように、足元は濡れている。水分が、靴下に染み込んできて不快極まりなかった。

床の水は一体何なのだろう。そう思って下に目をやったそのとき、首筋に一滴の雫が垂れてきた。

「わぁっ」

驚きのあまり情けない声を上げる。そして同時に、仰け反ったせいですべってその場にへたり込んでしまった。

「いってぇ・・・ん？」

沖田はへたり込んだおかげでやっと床の水の正体に気づくことになる。

「これ・・・血？」

そう、床は血で真っ赤に染まっていたのだ。いや、よく見ると床だけではない。四方の壁にも、天井にまで、誰の物とも分からぬ血液が付着している。部屋中に血液をぶちまけたかのような、そんな状況だった。

「なんだよ、これ？」

そう呟いた沖田は立ち上がろうとして、悲鳴を上げることになる。

額から上部分が吹き飛んでいる、佐伯　英二の死体と目が合ったからだった。

第二話

ｃａｓｅ２　宮内　健吾

「つまんない仕事選んじまったな」

酒が入ると、宮内はいつもそうこぼしていた。

ドラマで見るような壮絶な事件、それを暴く自分。そんな期待は簡単に裏切られ、仕事といえば善良な市民を騙すような搾取。つまりは切符きり。勤労四年、これまでに携わった最も大きな事件といえば、ひったくり程度。想像とは大きく異なった。

交番勤務は退屈で、夜勤ともなると苦痛以外の何物でもなかった。何かが起こるわけでもない、誰かが尋ねてくるわけでもない。便りが無いのはいい便り。そんなのを望んでいるわけではなかった。ただ、休憩室でごろごろするだけだった。

一糞つまんねぇ。

この日も宮内は勤務中にも関わらず、隠れながら酒を煽っていた。どうせ誰も来ることはない、大した仕事も無い、誰も来ず何もすることの無い交番で時間までちょびちょびと酒を飲みながら携帯電話をいじる。そんな職務を続けていた。

宮内は怠惰な人間ではなかった。むしろ勤勉で、明確な夢を持ち、それに突き進む熱い男だった。だからこそ、自身の夢がこのような形で破られたことにより、情熱を完全に失っていた。その結果、世に乱雑する腐った公務員、その典型に成り下がっていた。

「こいつ業者じゃないだろうな」

テレビを見て酒を飲みながら、いつものように出会い系サイトのチェックに余念のない宮内。

「大体、写真つきの奴は業者だからな」

この半年間で数回、出会い系を通して女性に会っていた。中にはその日に男女の関係にまで行けたケースもあり、味をしめた宮内は軽度の出会い系依存になっていた。

日本酒を口に含んだと同時に、けたたましい音を伴って宮内の携帯電話が振動を始めた。

宮内は慣れた手つきでメールを開くと、無言でディスプレイを見つめた。

一同窓会のお知らせ。来月の中旬に同窓会をしようと思います。参加希望者は堺にメールしてください。

宮内は決してクラスの中心ではなかったし、友人の多いほうでもなかった。事実、メールを送ってきた堺とも多くを語ったこともない。そんな自分にも当然のように同窓会の参加の是非が送られてくる事実に、宮内は一人失笑した。

「行くわけねぇだろ、つまんねぇ」

この四年で、彼の性格は曲がっていた。

酒を飲むと、余計にその曲がり方が大きくなり、二十代前半にして愚痴を垂れ流すようになる。誰に聞いて欲しいわけでもない言葉。現状がたまらなく煩わしかったが、かと言ってそれを打破しようとするわけでもなかった。

「すいません」

突然、交番の入り口から声がした。続けて、

「すいませーん」

と、先ほどよりも大きな声。どうやら厄介者が来たらしい。

―どうせ財布でも落としたんだろ、めんどくせぇ。

その場で寝転がっていたかったが、重い腰を上げると、声の方へと歩く。酒の臭いがばれてはいけないと宮内はガムを口に放り込んだ。

「どうしました？」

目の前に突っ立っている冴えない男にそう言うと、気だるそうに宮内はデスクに腰掛ける。さも、仕事で疲れている、とでも言いたそうに。

「あの・・・」

三十代と思われる男は、うつむき加減で、小さく呟いた。

―なんだってんだよ、鬱陶しい。用があんならさっさと言えよ、グ

ズ。

宮内が心の中で悪態をついていると、男はぽつりと、

「実は、人が死んでいるのを発見してしまって・・・」

半笑いでそう答えた。

「・・・は？」

宮内は意図せぬ言葉に思わず間抜けな声を発してしまった。

―なに言ってんだ、酔っ払いか？

突然すぎて状況の飲み込めない宮内に男は、

「人が死んでいたんです」

と先ほどと同じ口調で言った。

「人が、死んでいた？」

少しずつ、現状を把握していく。そして、それに伴い、人が死んだと告げられているにも関わらず、宮内の心は踊った。

それも当然である。夢にまで見た、事件が起きたのだ。目の前の男が嘘を言っていなければ。

「昨夜未明、人が死んでいるとの報告を受け、発見者とともに現場に急行し、そこで遺体を発見。検査結果はまだ出ていませんが、遺体は身体的特徴から家主の佐伯　英二と見て間違いないと思われます。現場に急行した際には、血液の凝固などから死亡から一日以上経過していたと思われます。死因は頭部の破裂による即死。部屋には大量の血液が巻き散らされていて、凄惨たる状況でした。第一発見者の沖田　正信を重要参考人として勾留しています」

宮内は大勢の警官の前で実に堂々としている。事件に最初に関わったとして捜査の第一線を任され、現在、温海市警察署で急遽開かれた捜査本部で同僚たちの前で報告を行っている。

「被害者の佐伯　英二５６歳ですが、豊樹市の自宅に一人で住んでいます。特に身よりもなく、現在は東都大学の研究所で働いていて、週に一度、東都大学に行っていたようです。しかし、その他の時間は自宅に篭っているようで、週の多くを自宅で過ごしていたとの供述を得ています。部屋は荒らされていた様子もなく、物取りの犯行の可能性は極めて低いと思われます」

昨夜徹夜で作った書類に目を通しながら饒舌に報告を続ける宮内。その心内は嬉々としていた。

「発見者を重要参考人として勾留しているとのことだが、発見者の沖田という人物に関しての報告は？宮内巡査」

口元に髭を蓄えた、大垣刑事が口を開いた。ベテラン刑事として署では有名で、数々の功績を挙げている、宮内の理想像のような男。

「はっ。沖田　正信３４歳。職業はフリーのジャーナリストです。とある記事のために被害者の自宅に侵入。そこで遺体を発見したと

のことです。ただし、本人の供述によれば発見した後、一度沖田自身の自宅に戻っています」

「自宅に戻っている？死体を見つけたあとにか？」

「はい。怖くなったらしく、一度は無関係を装うと思ったようですが、自宅に戻った後思い直し、警察に通報しに来たとのことです」

そこかしこで、

「沖田が怪しい」

だなどという短絡的な発言が飛び交っている。

その様を見て宮内は苦笑した。そのような単純な事件ではないと宮内は確信していたからだ。いや、そのような単純なものではないことを望んでいただけかもしれない。

「沖田　正信は重要参考人ではなく、容疑者なんじゃないのか？」

どこからともなく聞こえてきたその言葉に、宮内は憤りを感じた。憧れた警察のこの態度はなんだ。常識的に考えて単純明快な事件ではないことは目に見えている。ここでの考えなしの発言がどれだけの捜査の妨げになるか、誰も分かっていなかったのである。ここでの警察の誤った判断が、初動捜査の遅れになり、そして後に多くの命の灯を消すことになる。

「この事件はそのような簡単なものでは無いと私は考えます。現に、容疑者は沖田だけではありません。被害者の死亡と同時刻と思われる時間帯に佐伯宅から男が一人出てきたと、沖田も証言しています」

宮内には自信があった。現場の異様さを目の当たりにしたからこその自信。あれは人の手によって出来るものではなかった。その自信が言葉になって表れた瞬間であった。しかし、宮内のその言葉に対する返答は、

「初めて捜査に加わる青二才が偉そうな口を聞くな」

だった。宮内の言葉は簡単に蹴られたのである。

捜査本部では、結局、何よりも沖田の取調べを重要視した。宮内の考えは考慮されることはなかった。ただ、宮内にとって幸いだったのは沖田から通報を直接受けた自分が沖田の事情徴集を担当させてもらえることだった。捜査の中核に自分が座している。それだけで宮内の心は躍ったのだった。

捜査本部での会議が終わると、宮内はさっそく沖田の元に向かった。沖田がいるのは取調室。宮内は弾む心を落ち着かせながら、取調室のドアを開けた。

「お待たせしてしまってすいません」

軽く会釈をすると宮内はデスクを挟んで宮内の前の椅子に腰をかけた。沖田もそっけなく会釈を返す。

「では、遺体を発見したときの話を聞かせていただきたいのですが」

「それは何度もお話したかと思いますが」

「すいません、一応、そういう決まりなので」

「はぁ、まぁいいですが」

鉄格子のついた窓から入って背中に降り注ぐ直射日光が、やけに熱く、額に汗を浮かべながら沖田は頷いた。

「沖田さん、あなたは佐伯　英二さんを調べていた。そもそもそれは何故なのですか？ジャーナリストの貴方が動くということは、それなりの記事になるという裏づけがなければ行動を起こさないはずですよね？にもかかわらず貴方は実際に佐伯宅に侵入している。あの日、佐伯　英二さんが殺されるのをあらかじめ知っていたということですか？」

熱くなっている、冷静になれ。宮内は自分自身にそう言い聞かせながらも、冷め切らない熱を感じていた。その熱を眼前の男に浴びせる、謎の究明のために。それは宮内にとっては義務であり望みであり、悦楽であった。自分の中に確かに存在する熱が、歓喜の笑みをこぼさようとするのを宮内は必死で堪えていた。

「それに関しては黙秘させて頂きます。私もジャーナリストという仕事柄、自らの得たスクープを他人に簡単に教えるわけにはいかない。ただ言える事は、私が持っていたネタと今回の事件は全く関係性はありません。彼があの日死んでいるだなんて当然私は知る由もなかった。何度もお話したとおりです」

「そのネタというものが今回の事件に関わっているのではないですか？」

「・・・関わってはいません」

沖田は一瞬口ごもった。それは決して隠そうとしてそうなったわけではなく、話したところで信じてもらえるわけが無いとタカを括っていたからだ。事実、沖田の考えは当たっていた。佐伯宅にはいくつかの捜査すべき対象があるにもかかわらず、警察はそれらを歯牙にもかけていなかった。

「・・・教えていただけませんかね？何を調べていたのか」

「それだけは無理です。みすみすネタを漏らすなんて愚行犯しませんよ」

「そうですか・・・」

宮内は両手を組みながら、続けた。

「では、何故一度自宅に戻ったのですか？」

その問いは沖田にとってあまりにも核心を突いた質問であり、動揺を誘うには十分過ぎるものだった。

「・・・それに関しても言ったでしょう。死体を発見して怖くなったんです。このままじゃ自分が殺したのだと疑われる。だから見なかったことにしようと一度は通報もなにもせずに逃げた、と」

「ですがね、なんらかの自分にとって不利になる証拠を隠蔽するために自宅に戻ったとしか考えられないんですよ、我々としては。貴方もジャーナリストなら分かりますよね？」

その言葉は沖田にとって反論しようのないものだった。事実、こうなるのを確信していながら、一度現場を後にしていたのだから。

「分からなくは、ないです」

覚悟していたとはいえ、容易に現状から脱却することは難しかった。かといって、ここでこのままいつまでも拘束されていられるほど沖田は暇ではない。調べることが山ほどあるからだ。

「・・・」

宮内は黙った。ときに沈黙は、言葉以上に意志を相手に伝える手段になることを知っていたからだ。それが沖田にも伝わる。それでも、多くを語るわけにはいかなかった。否、語っても無駄だと感じていた。

暫くの沈黙の後、沖田はぽつりと、

「・・・あの、いつになったら家に帰れますかね？」

と呟いた。

沖田のその言葉は当然だった。十二時間もこんな所にいさせられるのはたまったものではなかったのだ。

「事情徴集が済めばすぐにでも帰れますから」

調書をぺらぺらとめくりながら、宮内は沖田の瞳を見ないでいった。それは宮内のくせで、心にもないことや深く考えないで言葉を発するときには必ずといっていいほど相手の目を見つめなかった。

「・・・人殺し扱いかよ」

「いや、そんなことはありませんよ」

「これでも一応ジャーナリストをやってるんだよ、馬鹿にしないでもらいたいね。どうせ俺を殺人者だとでも思っているのだろう？調べれば分かるだろうに、あんなのは人間の出来る殺し方ではないとさ。あんたらがそんなだから解決する物もしないんだよ」

沖田は机を叩きながら罵る様に言った。普通なら、沖田の剣幕をなだめようとするところだろう。しかし、宮内は沖田の剣幕ではなく言葉それ自体に着目した。それは、「人間の出来る殺し方」だった。

「まるで、被害者は化け物にでも殺された、というような言い方をしますね」

高波のような沖田の口調に対して、それこそ凪のように穏やかに宮内は言った。

「化け物？そりゃまた非現実的だ」

「では、何が佐伯さんを殺したのなら、現実的だと言うのですか？貴方は、人間の出来る殺し方ではない、と仰った。では、何だと言うのです？」

「それは・・・」

沖田は黙るしか出来なかった。自分でも笑ってしまうようなことが思考を支配しているのだ、それも当然である。そして、その沈黙が宮内にとっては好機であったのもまた当然であった。畳み掛ける

には今が絶好の時だった。

「貴方は、何かを知っている。それも重大な何かを。佐伯　英二殺害の重要な何かを。正直、捜査本部は貴方を容疑者扱いしています。だからこそ、こうして私に貴方の取調べをさせているのですから。ですが、私はそうは思っていません。今回の事件はもっと大きな何かがあると感じています。その何かの手がかりを貴方が得ている、そう思っています」

「それは、勘ですか？警察の」

「そうでしょうね」

警察としての勘、そんなものは宮内にはなかった。それも仕方ない、今回の事件が彼にとってはじめての事件なのだから。だが、彼はそう思い込んでいた。自分の警察としての勘がそうさせていると。この事件は簡単なものではないのだと、思い込んでいた。そのほうが彼にとって都合のいいものだった。自らの欲求を、満たすために。気分はさながら探偵だった。

「・・・まだ、確証があるわけではないんです、すいません」

うつむきながらの、消え入りそうな声だった。

「確証があれば、話してくれるのですか？」

「えぇ。ただ、確証を得た時には、もしそれが私の考える通りだったならば、何もかも、遅すぎると思いますが」

何かを覚悟した目だった。宮内は初めて、沖田の中に何らかの強

い意志を感じた。それは揺らぎの無いもので、偶然とか必然とか、運命とか、そういったおよそ人が作り上げた幻の不可侵の壁をも容易く乗り越える、そんな強さだった。そしてそれは宮内に、死を悟った人間はおそらく彼のような瞳をしているのだろうと思わせた。

「・・・私が掛け合ってみます、貴方を家に帰すように。私は下っ端なので上手くいくかはわかりませんが」

「泳がせる、とでもいえば案外簡単かもしれませんよ」

「それも・・・そうかもしれませんね。流石はジャーナリスト。口が上手い」

二人は同時に吹き出した。二人きりの取調室で、二つの笑い声が静かにこだました。

それから約三時間後、取調べを終えた沖田　正信は宮内の助けもあり、温海市警察署を後にすることになる。

第二話（後書き）

感想を書いて頂けると光栄です。よろしくお願いいたします。

第三話

第三話

一人間の脳とはこの世で唯一、我々が全てを理解することが不可能なものである。

佐伯　英二は東都大学在学時に学会でこの言葉を残している。これは人間の脳の限界を語る一方で、それの万能性を提唱したものでもある。当時、この彼の言葉を真に理解できる者はいなかった。皆が一様に、脳の性能の高さと深遠さを表した言葉だと思っていた。だが、佐伯　英二の言葉の真の意図はそんなものではなかった。この言葉の意味に気がつくものは、それから二十年間、現われはしなかった。

「佐伯　英二の考えや行動というものは凡人には理解の出来ないことばかりだな。それにしても、あの警察官、確か宮内とか言ったか、あいつが言うには現場には大した証拠品はなかったらしいな。ウイルスに関連したものでもあれば流石に無能な警察でも調べに動くと思うが、なにも見つからなかったのだから仕方の無いこと、か」

自室で煙草をふかしながら、沖田は佐伯　英二に関する資料を読み漁っていた。佐伯　英二はバイオタイド理論、テロメア、ガイア理論、菌の培養、キメラの生成といった科学の領域に身を置きながら、一方で戦争というものに関心を寄せていた。実際、ある筋から得た資料には、佐伯　英二の未発表の戦争論が多数見られる。そして、その戦争論は思想の観点からいくと限りなく右を向いているのだが、読み手である沖田は、佐伯　英二を右翼だとは思わなかった。むしろ、彼の考えこそが水底までも透いて見えるほどの濁りの無い

正義のようにすら感じたのだった。

一何故かくもこの国の人人はこうも風説ごときに簡単に身も心も流され、またそれを恥じようとすらしないのだろうか、私には全くといってよいほど理解が出来ない。その上それでいて、彼らは自らを優れていると勘違いをする極めて悪劣な生き物である。だが、私もそのような愚かな生き物の彼らと同じ人種であるのは変えがたい事実であり、それ自体が極めて私にとって遺憾なことではあるが、人種を卑下してしまうと先達の方方をも愚弄してしまうことになり、それは私自身を周囲の滑稽な生き物と同列に扱うこと以上に私を殺すことになりうる。だからこそ日本国に住まう日本人という種の低劣さなど認めては決してならない。では何がこうも現在の日本人を落としたのか。それはあえて言うなら時代であり、愚直に述べるなら敗戦という結果であろう。敗戦の事実は認めるし、時代というものが嬉々として流れ続けるのだから、それが人人に与える影響という物も認めざるを得ないのだが、それでも戦勝国から猿だの犬だのと罵られるのも仕方が無いほどにこの国の人人は簡単に自らの国を愚弄する。何処の世界に自らが悪いと言い張る間抜けな国民が存在するのだろうか。長い歴史を鑑みても、質の低下した現日本人しかそのような人種はいない。

沖田は「憎　日本」と銘打たれた佐伯　英二の著書に目を通していた。著書といっても出版されたわけでもなく、薄汚れたルーズリーフに延々と何百枚にもなるほど文章が並べられたものであった。

「・・・」

沖田はそれが探しているものと関係性がないとは分かっていながらも、読み続けた。過去の経験上、そういった一見無関係のものが大きく関わっていることが何度もあったからだ。

―そもそも、何故中国や韓国といった国は戦勝国気取りをしているのだろうか。まぁ、周囲が呆けてしまうような事を偉そうに主張するような彼らの思考回路というものは理解しようとしても無駄なことだ。彼らには誇りという概念が存在しないのだから私が彼らを理解できなくても仕方の無いことである。しかしながら、日本国民は別である。もともとは誇りを命よりも大事に扱う人種のはずなのであるのだが、彼らには先達の方方が深く心に刻んでいた誇りというものを今現在持っているとは到底思えない。過去、戦勝国の腹いせとして行われた東京裁判で自決をしながら生きながらえるという恥を晒しながらも、少しでも自国を優位にと戦った東条英機のような誇りというものは今の日本国民にはないのだろうか。そして、その東条英機を英雄視するのならばまだしも彼を自国民が戦犯だなどとのたまう姿はあまりにも滑稽であり愚かであり、情けない。大体、我我日本国民は自国の英雄を軽視する前に諸外国の悪徳さに関して言及するのが先なのだ。弁護側の弁護は理由もなく悉く却下され、検察側の主張は証拠も無いのに全て通る、こんなふざけた裁判があっていいものか。おまけに中華民国という国に至っては裁判官という職に就く資格すら持たない者を東京裁判の裁判官として置いたのだ、そのような行為は国として最も恥じることであり、そのような低俗な人種及び国に頭を下げる価値などどこにもない。にもかかわらず、馬鹿の一つ覚えのように誇りを切り売りし続ける日本国民。もはや援護のしようもないのかもしれない。

「もっともだな」

吸い終ったタバコを灰皿に押し付けながら、沖田は呟いた。

―戦争では多くの命が消えていった。あたかもそれには何の価値もないかのようにいとも簡単に塵になっていった。だが、本当に価値

はないのだろうか。我我残された国民は彼らのことを戦犯だなどと罵ってもよいのだろうか。答えは当然両者とも、否である。自国のために命を賭けたものたちの思いを価値のないものだなどと決して述べてはならない。家族や愛する者を守るために死んでいった者たちを戦犯などと罵ることが許されていいはずは無い。彼らは、あくまでも、戦士であり、英雄だったのだ。だが、私がこのような考えを提言すると、愚劣な左の人人は私を戦争賛美のキチガイのように蔑むだろう。残念ながら私は戦争を賛美などしていない、むしろ戦争という行為自体は憎むべき人人の所業であるとすら考えてさえいる。ただ、その中で命を賭した人々を軽視したり蔑むことが愚かであり、反日であるのだ。

佐伯　英二の考えはあまりにも明確だった。それは戦争反対、平和などと何の考えも努力もなしにのたまう愚かな連中よりも、天皇を崇拝し日本国の優位を世界中に知らしめようなどというファシズムの懐古主義連中よりも明確で、あまりにも分かりやすかった。

「確かに、東京裁判での戦勝国共の横柄さにはほとほと呆れるものがあった。現に今では、当時の裁判は間違っているという考えが日本だけでなく諸外国でも広く知れ渡っている。あくまでも情報統制などがいまだにされている共産圏以外での話だが。だが、それでも、戦争を肯定は出来ないな。・・・いや、彼も肯定はしていない、か」

一戦争に負けたからこそ今の平和がある、とどこぞの無能者はのたまうが、そんなものはどこにもありはしない。あるのは洗脳され、頭を下げることしかしなくなった、いや出来なくなった犬と化した国民だけ。これが平和だとでもいうのか、笑わせる。自らを投げ打った先人達を蔑むような国民が安穏と暮らしている時点で平和なわけがない。

沖田はすっかり冷め切ったコーヒーを飲み干すと、カップの内側にくっきりとついた黒いリングが目についた。しばらくその黒いリングを眺めていたが、すぐに飽きたように他へ視線を移した。

移した視線の先は、点けっ放しのテレビだった。昼から延々とニュースを吐き出し続けているそのテレビだったが、佐伯　英二の事件に関するものは何一つ映し出しはしなかった。それは当然、あまりにも不自然なことだった。

「マスメディアの大好物だろうになぁ、この事件。なのにどこの局もこの事件には触れない。情報規制？いや、それなら俺にも警察からの口止めやマークがつくはずだ。だが、どうだ。そんなものは特にない。つまり、警察は情報規制なんてしていない。単に、箸にも棒にもかからない下らない事件と判断されたのか、もしくは、マスコミが誰も知らないだけか、どっちかだな。うん、納得」

自分に言い聞かせるように沖田は言った。暗示でも自分にかけなければ納得など到底出来ないから仕方の無いことかもしれない。情報規制はされていないが、情報がメディアに流れていない、もしくはあえて報道しない。どう考えても、マスコミュニケーションの性質を考えるとあまりに不自然である。彼らは数字のためならば日本刀を持った男の白昼堂々の犯行すら電波に乗せるのだから。

だが、気にする余裕もなかった。調べることが山ほどある。好血菌の資料は警察に押収されることを恐れ他人に渡しているから、それに今は目を通すことは出来ないが、他の角度から佐伯　英二を虱潰しに調べなければならない。事態は当初の軽はずみな状況からは想像も出来ないほどに深刻だからだ。

「・・・」

視線をテレビから佐伯　英二の資料に戻した沖田は黙々と資料を読み続ける。ただただ黙々と。その際に一言も発することはなかった。沖田にとってどんな難解なことが書かれていても、沖田にとってどんな驚くべきことが書かれていても、一言も発しはしなかった。

しかし、「憎　日本」の最後の一文に、沖田は一言

「えっ」

とだけ小さく漏らすこととなる。そこには殴り書きで

「みな死んでしまえ」

とあった。

第三話（後書き）

感想よろしくお願いいたします。

第四話

case　3　国田　章

一真理を掴んだとほざく者よりも、真理には程遠いと述べる者のほうがまだ、真理には近い。

十階建てのマンションの最上階。そこから見下ろす街並みを国田章は何よりも好んだ。外科医になって十年近く経ち、地位も名誉も確固たるものにしていたが、彼のそういったものに対する思いは常軌を少々逸脱していた。他人によく見られようとすることに固執し、そのためならばどんな努力も惜しまなかった。

「朝焼けってのはどうしてこうも染みるのかな」

誰に言うわけでもなかった。３ＬＤＫのマンションに一人で暮らしているのだからそれも当然といえば当然である。別に一人を望むわけではなく、かといって誰かと共にあろうともしなかった。それは他人と一定の距離を保とうとする国田の癖であると同時に、他人を見下し認めようとしない性格のせいでもあった。だが、それをとくに苦とも感じない、それが国田　章という男だった。

幼少期から天才だ神童だなどと騒がれていたが、自分がそういった類の人種ではないことはよく分かっていた。ただただ誰にも知られる事のない努力の賜物だった。だがそれが結果として自らの性能の高さを周囲に知らしめることになり、傲慢や自己中心的な内面を形成していくことになる。自らの能力に自分自身を形作られるジレンマは酷なものであったが、それ以上に周囲の羨望の眼差しが心地よく現状に満足してしまっていた。

「規則正しい生活ってのは間違いなく体に良いのだが、休みの日でも無駄に早起きしてしまうってのは考え物だな、どうにも勝手に目が覚めてしまう。」

窓から街を一望しながら、国田は大きな欠伸をして呟いた。昨夜のマッカランが抜けきっていないのか、普段よりも体にだるさをどことなく感じる。それでも忙しない毎日を乗り切るための充電時間である休日をどう過ごそうかと頭をめぐらせると、少しだけ心が躍るのを感じた。

「・・・今年で三十四なんだがな」

子どもっぽい部分が残っている自分に苦笑いをして、自らに毒を吐く。

国田の一日はインターネットでニュースを読むことから始まる。目を通すニュースは芸能から株価、経済、はたまたゴシップ記事にまで至る。興味があるわけではなくこれもまた知識人をきどるための、いわゆる見栄であった。どのような分野に関しても博識であろうとする、他人より優れていようとする、彼の思いから産まれた習慣であった。

この日も平日と変わらず、ニュースに目を通す国田。大して目新しいものもなく、退屈そうに欠伸をする。

「やはり、飲みすぎだな。欠伸が止まらない」

あごが外れんばかりの大きな欠伸。同時にうっすらと涙まで浮かんできた。

見飽きたようなどれも似通ったニュースは刺激もなく退屈そのものだったが、それでも惰性で読み続ける。習慣とは簡単には変えられぬもので、国田のそれも同じだった。つまらない。そう思いながらも続けるしかなかった。どこぞのアイドルがホテルから男と出てきただの、雪男の正体だの、この国の平和さにはほとほと呆れるものがあった。こんな記事を嬉々として載せる馬鹿もそうだが、こういった記事のほうが興味を引かれる人口が多いというのも愚かな国民性を象徴していた。

「堕落したもんだ」

わざとらしく溜息をつくと、うっすらと口元に笑みをこぼしながら国田は言った。世の中に溢れるこのような下らない情報は必要なのだろうか。まぁ、こういった下らない記事があるからこそ他の記事が引き立つのだろう。要は芸能というやつは引き立て役なわけだ。

そんな中、国田の目を引く記事が一つだけあった。大した記事でもないのだが、眠くてどうしようもない眼を覚まさせるには、彼にとっては十分だった。

―エボラウイルスの無毒化に成功。増殖を防ぎ人間には感染しないという性質をウイルスに持たせる。これにより本来はエボラウイルスを扱う際、バイオハザードを防ぐため特殊な施設が必要だったのだが、これからは無毒化ウイルスを使う事で安全に研究が行えるようになる。エボラウイルスの研究が進めばエボラを有効活用できるようになるかもしれない。エボラ出血熱とは、フィロウイルス科のエボラウイルスを病原体とする急性ウイルス性感染症を指す。最初にこのウイルスが発見されたのは１９７６年、スーダンのヌザラという町で、ある男性が急に３９度の高熱と頭や腹部に痛みを感じて

入院、その後消化器や鼻等から激しく出血し、死亡。その後、その男性の近くにいた２人も同様に発症、それを発端に血液や医療器具などを通して感染が広がった。そして、最初の感染者の男性の出身地付近のザイールのエボラ川から病気を引き起こしたこのウイルスは名前をエボラウイルスと名づけられ、病気もエボラ出血熱と名づけられた。致死率は５０～８９％と非常に高い。

「・・・」

黙ったまま記事に目を通す。この記事に目を奪われたのは医者としての性分ではなかった。それは昨夜きたメールのせいであり、国田が仕事の虫であるからでは決してない。

国田は俗に言う冷めた男だった。どのような事態にも冷静さを欠かない、というよりすぐに自分を戒める事ができる男で、それが結果として他人に冷めているという印象を与える原因になっていた。しかし、今回は違った。どうにも心が落ち着かず、ふわふわと浮いた心を抑えられずにいた。それはメールの内容のせいなのか送り主のせいなのかは定かではなかったが、それでも生まれて初めて感じる心の躍動に自分自身でも驚きを隠せなかった。

「そういえば、あいつがいたな。・・・あれ、名前なんだっけ？同じ大学の・・・そうだ沖田だ。沖田　正信。たしかジャーナリストになったとか言ってたな。・・・聞いてみるか」

そう言うと、国田は十二畳ほどのリビングのちょうど真ん中に配置されたテーブルの上の携帯電話に手を伸ばした。某家電ショップで「一番性能のいいやつ」と店員に頼んだら出てきた真っ黒の携帯電話。なにやら無駄に機能が豊富らしいが電話とメールさえ使えれば何も文句のない国田にとっては、まさに宝の持ち腐れであった。

慣れた手つきで携帯電話のメモリーから沖田　正信の名前を探す。そういえば連絡を取るのは五年ぶりくらいか、などと思いながら沖田の番号を探していると、大した苦労もせずに彼の番号は見つかった。文明とは大したものである。

「・・・」

一瞬迷ったようにディスプレイに映し出された沖田の携帯番号を見つめていたが、国田は表情も変えず親指を通話ボタンに近づけ、ゆっくりと優しく押した。その姿は端から見れば国田の心の動きを表しているようには到底見えるものではなく、感情の抑圧を得意とする彼そのものの様だった。小さな機械音とともにディスプレイにはＣｏｏｌｉｎｇの文字が表示された。これで後は、沖田が電話に出さえすればいいだけだ。携帯電話にくっつけた耳から空気の波が鼓膜に伝わり、脳を巡り、国田に音として認識される。五コール目ほどだろうか、コール音は突然止み二、三秒の静寂の後に機械音ではなく人の発する言葉が携帯電話から国田の耳に届いた。国田にとってはひどく懐かしい音だった。

「もしもし」

どこか呆けたような声。どうやら起き抜けらしい。だが、休日のこんな時間に用も無いのに起きている国田が珍しいだけなのかもしれない。

「もしもし・・・沖田か？」

「あぁ。突然どうしたんだ？五年ぶりか、連絡してきたの」

「年数なんて関係ないさ。今、何やってるんだ？」

「寝てたんだよ馬鹿野郎」

通話口から伸びをする音が聞こえてくる。国田にとって、こういった自らの弱い姿を他人に簡単に見せるという行為は理解できないほどの愚行だった。凛とした姿しか他人には見せてはいけない、弱点は見せない。それが国田という男であり、彼の生き甲斐であった。

「それはすまなかった。だが俺が聞きたいのはお前が今現在どのような行動をしているかなのではなく、今何の仕事をしているかということなのだが」

「しがないフリーのジャーナリストだよ、エリート医師の国田くん」

「いちいち言葉に棘があるな、相変わらずのようで嬉しい。フリーのジャーナリスト、といったが新聞社は辞めたのか？」

「あぁ、新聞社は辞めた。上司と反りが合わなくてな。フリーとして活躍中ですよ、大活躍。もう大忙し」

気の無い返事。台本を棒読みしたような言い方が、国田に仕事が上手くいっていないことを伝えた。

「そうか、それは好都合だ」

口許にうっすらと笑みを浮かべて国田は言った。

「なんだよ好都合って？」

「少し調べて欲しいことがあるんだがな、頼まれてくれないか？」
「なんだ？一応言っておくが、俺はジャーナリストだからな？ネタのためなら喜んで動くが、そうでないならばテコでも動かないぞ」
意地悪く言う沖田。だが沖田にとって残念だったのは、沖田の扱いを国田が熟知していたことだった。
「最近ゴシップ記事にはまっていてな、ああいう俗なものがあるからこそ世の中というものはぐるぐると回るんだ、わかるか？浮くものがあるからこそ沈む物もある。世の全てがお堅いものだったら息苦しくて堪らないだろう？消費者に一呼吸置かせてやるのもお前らジャーナリストの仕事というものだと俺は思うのだが？」
「ゴシップかよ。・・・・内容によるな」
「その点は任せておけ。出てきたものによっては大がつくほどのスクープになるはずだ。当然、空振りの可能性も大きいがな、裏づけはないし」
国田の優れているところは学問に秀でたところでも、教養の深さでもなく、人心掌握術であった。操る術が長けているというよりも、相手がどれだけ国田自身に依存しているかを的確に把握し、手のひらで転がすことに長けていた。憧れを抱く者ほど御しやすい者はない。こうして国田は多くの人間を利己的に使役する。さらに、それがまた、快感にも繋がっていた。
「・・・随分だな。で？その内容は？」
「詳しくは長ったらしくなるしメールで送るよ。アドレスは変わっ

ていないよな？そこに調べるべき人物の住所なんかも加えておく。任せたからな」

「任せたって、まだやるとは言ってないぞ」

「こんなこと頼れるのは俺にはお前だけなんだよ。頼んだぞ？すまないが忙しいから電話を切る。すぐにメールを送るから待っておいてくれ。それじゃあな」

携帯電話から沖田の声が聞こえてきたが、それを遮るように通話を切る。こういうやり方が自分に依存した人間にとっては効果的だと知っているからこその横暴。先ほどと同じように口許にうっすらと笑みを浮かべて、国田は再びパソコンに向かった。今度は情報検索のためではなく、彼にメールを送るために。

メールソフトのフォルダをダブルクリックしばらく待つとフォルダが開かれた。メール内容を添付するために受信メールの欄をクリックし、昨夜来たメールを開く。二件ほど新着メールがあったが今は見向きもしない。昨夜のメールを開くと、国田はそれをもう一度読み直した。

―送信者　佐伯　英二　　件名　国田　章様へ　　本文　この世で最も美しいものは何だと思う。それは強いものだ。それも肉体的な強さではなく、生命的な強さ。この地球上に人間という種よりも現在優位な位置に立つ生物はいない。だが、私には受け止められないのだよ、その事実が。許せないのだ。だからこそ、その優位を崩してやろうと画策してみたのだがそう簡単にいくものではなかった。しかし、おそらくは成功したと言えるだろう。人という種以上に強い種の誕生に。これがキミにとっても実りのある報せであると願っている。ヒントはザイール川だ。では。

国田はメールを読み直すと、そのメールに添付されたデータを開いた。そこには「好血菌」と名付けられたもののいくつかのデータが書かれている。そして、データの下には画像が張られていた。その画像は、頭部が破裂でもしたかのように周囲に散乱している小鳥の写真であった。その様は見るものに安易に不快感を与え、同時に軽度ではあるが恐怖感を同時に与える。もとは真っ白であったであろう小鳥の羽は鮮血に染まっている。これを嬉々として写真に収めた佐伯　英二という人物の心根は少々理解に苦しむものである。

そして、その画像の下に何を考えたのかこう書かれていた。

一粛清の始まりは我が命から

この時、国田はこの言葉の意味を、理解できてはいなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7972e/

好血菌

2010年10月10日20時59分発行